六月二十日夜渡海

六月二十日 夜 海を渡る　蘇 軾

元符三年（一一〇〇）六十五歳　六月二十日、海南島を離れ北へ海を渡る船中で作る。

1 参横斗轉欲三更　　参横はり 斗転じて 三更ならんと欲
2 苦雨終風也解晴　　苦雨 終風 也た解く晴る
3 雲散月明誰點綴　　雲散じ 月明らかにして誰か点綴せん
4 天容海色本澄清　　天容 海色 本 澄清
5 空餘魯叟乘桴意　　空しく余す 魯叟 桴に乗ずるの意
6 粗識軒轅奏樂聲　　粗 識る 軒轅 楽を奏するの声
7 九死南荒吾不恨　　南荒に九死せるも吾は恨みず
8 茲游奇絶冠平生　　茲の游 奇絶なること 平生に冠たり

【語釈】●渡海…査注に引く王氏の交広春秋によれぱ、雷州半島の先の徐聞県から、晴れた無風の日には海南島がみえ、風向きがよければ一日一夜で渡る、という。●参横斗転…夜の時間の経過をあらわす。●終風…終日吹きやまぬ風。●誰点綴…この晴れ渡った空の明月に微雲を点綴することなど誰がしようか」ということ。●魯叟…孔子のこと。孔子は魯の国の人。叟とは長老の称。●乗桴…論語の公冶長篇にみえる孔子のことぱ、「道行はれず、桴に乗って海に浮かばん。我に従ふ者は其れ由か」を指す。この詠嘆のことぱのうらには、熾烈な時世救済の意欲がうかがえる。●**軒轅奏楽声**…上古の理想の帝王、黄帝は、軒轅氏。荘子の天運篇に黄帝が「**咸池の楽**」を洞庭の野に演奏するのを北門成が聞いて、始め懼れ、中ほどで怠り、終わりには惑うたという。黄帝はその理由を説明してきかせ、悟道の境界に入る次第を教える。●南荒…荒はとおいことをあらわす。

【解釈】参宿は横たわり斗杓も転じて、夜はまもなく三更になる。人を悩ますなが雨も、ひねもす吹きすさぶ風も晴れる時が来れば晴れるものなのだ。

いま、雲は散りつくし月が明らかに照る夜空には、むらくも一つも点ずることは許されまい。大空のようすも海の色も、かように清く澄みわたっているのが本来のすがたなのだ。むかし孔子が、「道 行はれず、桴に乗りて海に浮ばん」と言われた、そうした気もちも、わたしの心にまだいくらか残ってはいるが、いまではもう無意味なこと。むしろ、そのかみの黄帝、軒轅氏が洞庭の野で奏されたという古楽の妙味が、少しはわかりかかって来たように思う。

漢詩大系　近藤光男より抄出

【参考】『咸池の楽』とは?音楽による魂の目覚め一道家の中国古代音楽

「咸池楽論」は道家の音楽の哲学を代表する音楽論。＊咸池とは咸（あまねく）池（うるおす）の意味。

この楽は、日常的な生活に埋もれ、常識的な価値観に囚われている人々が、その音楽を聞くことで「道」の世界に目覚め、自己の生存の根源を意識し、求道者の三つの精神的な状態（懼れ、怠り、惑い）を経験するとされています。

第一奏　懼（おそ）れ　日常的自我の崩壊

最初の段階で、音楽は春雷のように天地を揺るがし、常に変化し続ける響きを展開します。これによって聴衆は恐れや不安を感じ、日常的な自己の崩壊を体験します。これによって世俗的な価値観や思考が打ち破られ、真実なる世界（道）に目覚めるとされています。

第二奏　怠（ぐんな）り　忘我

次に、音楽は聴衆の心の緊張を解きほぐし、心を怠りぐんなりとさせます。これによって聴衆は自己の葛藤や妄執から解放され、道の世界や絶対無分節、無限の「方外」の世界に遊ぶことができるとされています。

第三奏　惑（とまど）い　和光同塵

惑い（とまどい）最後に、音楽は万物が混沌とし、生死虚実を超えて現象する真実在の世界を表現します。聴衆は常識的な思慮分別を超え、言語や思考に縛られず、無知無欲の愚者となり、無為自然の道と調和し、無方の世界に逍遥遊ぶとされています。

このような音楽体験を通じて、個人の魂が覚醒し、浄化され、救済されるとされています。道家の哲学や音楽の理念が、音楽を通じて表現され、求道者の精神的な変容を促す役割があるとされています。

福永光司訳「荘子」天運篇、「芸術論集」咸池楽論より抜粋して要約。